

特集

みんぱく 活用術 大学編

地方でも気軽に出会える
異文化の入口、みんぱく
杉山祐子

ファッションの創造に
標本資料の熟覧を活かす
金谷美和

「見る」から「視点」へ
堤涼子

研究者の熱い語りが、みんぱくでの学びを
有意義なものにする
桑島紳一

録音がつなぐ
民俗芸能の過去と現在
植村幸生





日々日々、日常の憂いと共に

はっとりしげき
服部 滋樹

A「ひさしぶり。コロナ禍過ぎて色々変わったね。最近どうしている？」

B「最近は発酵食の幅が広がってね。今日もお土産があるよ」

A「えつ、いつも手作りの美味しい品ありがとうね。ウチの菜園も今年三年目で土が柔らかかカフカフになってきて、良い野菜が出来るようになったよ。僕からお野菜をお土産で。どうぞ。お仕事はどうなってる？」

B「相変わらず、大半がオンラインで出社してないね。生活が全てで、仕事は合間に色々やってるわ(笑)。そう言えば、小電力エネルギー会社の支援やってるよ、あれから多くなったからね」

買うのも多くなったけど、意味ある買い物って言うかね。みんなが社会参加して自分もサイクルに感じるの面白い物、そんなやつに」

B「なるほどね。医療データとかもブロックチェーンで繋がって世界中のデータが共有されて、様々解決するんじゃないかと思っていただけども、これが当たり前になったしね。医療データが始まると、他の社会データが解放されていくだろうなと思うんだけど、やっぱりそうだったね」

自宅にこもり気味で妄想が過ぎているが、数年後にはこんな世の中がやってきそつた。今現在でもすでに効率化が進み、目的や行動を先取りしたかのようサービスが安易に用意されている。かつては自ら作っていたようなモノでも、購入し、消費してい

るうちに作り方を忘れてしまった。その様な流れなのだと思う。でも効率化にも隙間が用意されていたら、どうだったろう。思考のための余白のようなものが。根源を探り、何故それがここにあるのか？

存在する意味にたどり着き、それぞれの役割を認識する。本来、そのような理解を深めることの喜びが、われわれの身近には満ちあふれているはずなのだ。

製品を買うのではなく、素材を買い、作る。そうしてみると、今日では作るという行為が、何かを学ぶ時間になっているように感じられる。マスク一枚を介したディスタンスが社会的な是非として問われることで、いつそう相手を気遣い、気配をも敏感に感じるように感覚が研ぎ澄まされていく。これはコロナによって得られた能力の一つかもしれない。

私たちは今、営みの再生から能力の再生へとステップを踏んでいる。それは日々の情報を新たな行為へ結びつける過程でもある。かつて外的影響から生きることを選択してきたように、また明日の未来も発見と喜びを味わいたい。

プロフィール

1970年大阪府生まれ。大阪を拠点に活動するクリエイティブユニット「graf」代表。京都芸術大学教授。建築、インテリアなどにかかわるデザインや、ブランディングディレクションなどを手掛け、近年では地域再生などの社会活動にもその能力を発揮している。プロジェクトからプログラムへ、ムーブメントからカルチャーへ育むデザインを目指し活動中。

目次

- 1 エッセイ 千字文
日々日々、日常の憂いと共に
服部 滋樹

特集

みんぱく活用術 大学編

- 2 地方でも気軽に会える
異文化の入口、みんぱく
杉山 祐子
 - 4 ファッションの創造に
標本資料の熟覧を活かす
金谷 美和
 - 5 「見る」から「視点」へ
——映像資料で学ぶこと
堤 涼子
 - 7 研究者の熱い語りが、みんぱくでの
学びを有意義なものにする
桑島 紳二
 - 8 録音がつなく
民俗芸能の過去と現在
植村 幸生
-
- 10 みんぱく回遊
翻訳される聖書、
翻訳されないコーラン
田中 鉄也
 - 12 みんぱくインフォメーション
 - 14 ○○してみました世界のフィールド
書物をめぐる歴史の旅二題
鈴木 広光
 - 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
箕——自然を編む知恵とわざ
今石 みぎわ
 - 18 シネ倶楽部 M
ガンディー気取り
——「ムンナ兄貴とガンディー」
杉本 良男
 - 20 ことばの迷い道
迷える異文化理解
平野 智佳子
 - 21 編集後記・次号の予告

表紙

クラウドファンディングの支援を受け立てられた、みんぱく入口のトーテムポール
制作：ビル・ヘンダーソン（マスター・カバー）、
ジュニア・ヘンダーソン、グレゴリー・ヘンダーソン、
ジョナサン・ヘンダーソン、2020年
撮影：大道雪代、2020年

みんぱく 活用術 大学編

地方でも気軽に出会える 異文化の入口、みんぱく

距離を超える出会い

「みんぱくに行ってみたいけれど、遠すぎて無理。異文化を学ぶのに地方は不利ですよね」。ある学生がもらったこの一言が、「みんぱく」を利用するきっかけだった。この学生の言うとおり、大学のある弘前ひろさきからみんぱくに行くには往復二〇〇キロメートル以上の旅をしなければならぬ。けれどみんぱくなら距離の隔たりもなんのその、地方でも気軽に出会える異文化の入口だ。

みんぱくは膨大な数の資料を所蔵している。世界各地で実際に使用されていた生活用品などの標本資料、人びとの生活や儀礼、芸能などを記録した映像・音響資料はどれも世界の人びとの文化を生き生きと伝えてくれる。異なる文化に触れるきっかけになればという思いから、みんぱくはこれらの文化資源を個人の来館者、研究者、教育機関にさまざまな形で提供している。

本特集では大学の授業に焦点を当て、これまで本館を活用された大学教員の方々による活用術を紹介する。展示場を歩くだけでなく、いかに観るか、利用するかといった視点が興味深い。研究・教育目的では映像資料や学習キット「みんぱく」など、貸し出しできるものも多い。小・中学校、高校の授業での活用例については、本誌2005年7月号の特集「学校がみんぱくと出会ったら」、2006年3月号の特集「博物館で総合学習」で紹介している。みんぱくの活動の一端を読者のみなさんにぜひ知っていただきたい。

みんぱくホームページ「大学生・教員のためのみんぱく活用」
https://www.minpaku.ac.jp/teacher/university/manual

すぎやま ゆうこ
杉山 祐子

弘前大学教授

弘前大学では、二〇〇七年から毎年みんぱくを借用して博物館資料論・実習を実施してきた。「こどものための……」を謳うみんぱくだが、資料の貸出という点でも、資料に触れられるという点でも、博物館の活動を学ぶ大学生にとって良い材料なのである。十数種類もあるばっくはどれも、限られた容量のスーツケースに地域の文化を特徴づけるモノが詰め込まれている。モノの選択と貸出に込められた意図は何か、モノ



みんぱく「エチオピアのコーヒーセレモニー」制作の参考とするため、エチオピアンコーヒーハウスのウォルデサアデク・ダウィット氏を招き、コーヒーセレモニーを実演してもらった(2019年)



豆菓子用皿
コーヒーポットと
コーヒーポット台

シェタニ(精霊)合作絵巻
2018年に東京で開かれたタンザニアのアーティスト、ヘンドリック・リランガ展(右、提供: 座・高円寺、撮影: 梁丞佑)。ワークショップで日本の子どもたちが描いたシェタニ絵巻に、タンザニアの子どもたちが絵を描き加えた長い合作絵巻(中、撮影: 金山麻美、2019年)。その後、絵巻は再び日本に戻り、弘前大学資料館企画展で東北と中国の精霊が描き込まれた(左、2019年)。距離を超えた文化の交流をめざす弘前大学の活動のひとつ

みんぱく
「イスラム教とアラブ世界のくらし」

ノに触れることにどんな可能性があるのか。これらについて考えることが実習の目的である。これまで「イスラム教とアラブ世界のくらし」を皮切りに、アンデス、モンゴル、インドネシアの地域のばっくのほか、「ブリコラージュ」などテーマ企画ものも含めて十種類ほどのばっくを借用した。

触れる資料の可能性

実習では一回あたりの受講者数を十名程度に

組分けする。授業を三つのパートに区切り、パートごとに視点を変えて進める。第一パートでは博物館の視点に立つ。まず既習内容の復習を兼ねてモノの状態を確認し、各自メモをする。同梱されている説明書を検討し、込められたねらいを知る。学生が気づくのは「博物館で働く人と同じように」モノを扱う主体となるよう借り手に促している点だ。資料が壊れたら「修理をせずにそのまま返却」するよう指示することで、博物館の仕事の実際を伝える

と評価する者もあった。第二パートでは借り手の立場で、モノに触れる驚きを経験する。意外にも多くの学生が手こずるのがこのパートである。「えっ、これ

何？」と素直な驚きを抱くのに、実際に触れるのは躊躇ちゅうちゆする。博物館のモノに触れてはいけないという長年の固定観念が呪縛じゆわくとなって身体がこわばるのだ。そんなこわばりをほぐすのに、「ブリコラージュ」ばっくの紙芝居形式展示品紹介解説カードで、クイズを出しながらモノに触れていく方法が役立つ。

第三パートでは学生の立場に戻り、意見交換をする。学部が違う学生同士でも、授業中にあれこれモノに触った経験を共有するので、具体的な意見が出て毎回盛り上がる。多く聞かれるのは、モノに触れることの新鮮さや、モノの肌理きりを感じる楽しさを知ったという素直な感想だ。

授業後はみんぱくのウェブサイトでばっくの内容物についての詳しい情報を収集し、「触れる資料の可能性」という題でレポートを作成する。授業では内容物の予備知識なしにモノに接する状態を作っているため、授業中の気づきを事後に収集した情報と照らし合わせると、考察が深まる効果がある。授業中の意見交換で「イスラム文化の服だと思っていたのに、日本製だったのが残念」と言った学生は、事後調査を通じてあらたにこんな発見をしていた。「日本製の服が入っていたのは、現地で高級品として好まれている事実を伝えるためだった。文化を作るモノはグローバルに国境を越える」。小さなスーツケースから覗く異文化の世界は、大きな広がりをもっている。

※みんぱくは適宜内容を更新しており、本稿の内容と異なるものがあります。



ファッションの創造に 標本資料の熟覧を活かす

かねたに
金谷 美和

国際ファッション専門職大学准教授

アメリカ合衆国の先住民スーの女性用衣服(ワンピース)。皮革の衣装は想像していたよりも重く、和紙のような手触りであることに学生は驚いていた(H0075561)

みんなの所蔵資料には、世界各地から収集された膨大な衣装が含まれている。重要なのは、それらが「本物」であり、人が作り、着用した痕跡が残っているものであるということだ。熟覧は、それら「本物」の衣装を、間近で時間をかけて調査することができる貴重な機会である。

創造に活かす

国際ファッション専門職大学は、ファッション産業で活躍する人材を育成することを目的として二〇一九年に設立されたばかりの専門職大学である。本校の学生の多くには、ファッションとは欧米の服飾であるという思い込みがある。世界には、豊かな形状、意匠、素材を用いた多様な衣装があるということ、まず学生には知ってほしいと思う。それらは創作にとっての宝庫となるはずである。世界的にも民俗的・民族的な意匠を創作に取り入れるデザイナーは多い。しかし、国際的に知名度の高いブランドであっても、異文化の服飾を利用可能な素材としてしか見ていないのではないかと疑うような、文化への配慮を欠いた取り入れ方が多く見られる。

フランス、アルザス地方の女性用頭飾り(ポネタヌ)。学生たちは、大きなリボンに惹かれてこの資料を選んだ。この地域では、頭飾りの形状が着用者のアイデンティティを示していることを学んだ(H0233688)



り、メモをとったりし始めた。また、写真ではわからなかった縫製の仕方や着用方法について、気づいたことを述べるようになった。調査の後、グループごとに口頭発表をし、最終的には一人

事実、当該民族集団から文化への敬意を欠いた取り入れ方に対して異議申し立てが次々と起こっている。

つまり、わたしは世界各地の多様な衣装を、文化的背景を知ったうえで、敬意をはらいつつ創作に活用する方法を学生に学んでもらいたいと考えている。そのためには、資料台帳を参照しながら実際のモノに触れる「熟覧」という方法が適している。デジタル画像のみで衣装を見ると、衣装というものが、人びとが自然環境のなかで長い時間をかけて作り出してきた文化的営為の成果であるということ、忘れがちになる。実物をじっくりと見ること、衣装そのものから学んでほしいと考えていたのである。

事前学習が大切

作業は、四人ずつふたつのグループにわかれておこなった。まず、人類史における衣装の起源についての文献を読み、テーマを「皮革の衣装」と「布の衣装」に絞った。次に、みんなのデータベースで対象となる収

一人がレポートにまとめた。自分たちの創作に活かす方法についても考察することができた。熟覧はけっして気軽にできるものではない。しかし、十分な予習と準備のうえで

おこなえば、学習効果は高い。



フランス、アルザス地方の女性用胸当て(ピエステトマ)。学生たちは、胸当てを現代の服飾デザインに活かす方法について考察した(H0233686)



野蚕糸(やさんし)を手織りで製織する方法を学ぶ筆者(右)。フィールドワークでの経験が授業に活かされる(撮影:上羽陽子、インド、アッサム州、2018年)

に沿って見るように勧めると、おそろおそろ資料に触り、そのうち夢中になって写真を撮った

についてグループで話し合いをした。また、熟覧時の技術的な注意点も学習した。

蔵資料を検索した。選ばれたのは、皮革の衣装からはアメリカ先住民の女性用ワンピースであり、布の衣装はフランスのアルザス地方の女性用頭飾りと胸当てであった。次に、資料の文化的背景を学ぶため、文献調査をおこなった。そのうえで、熟覧する資料の「何を、どのように、何に注目して」調査するのか

「見る」から「視点」へ 映像資料で学ぶこと

つづみ
堤 涼子

フェリス学院大学非常勤講師

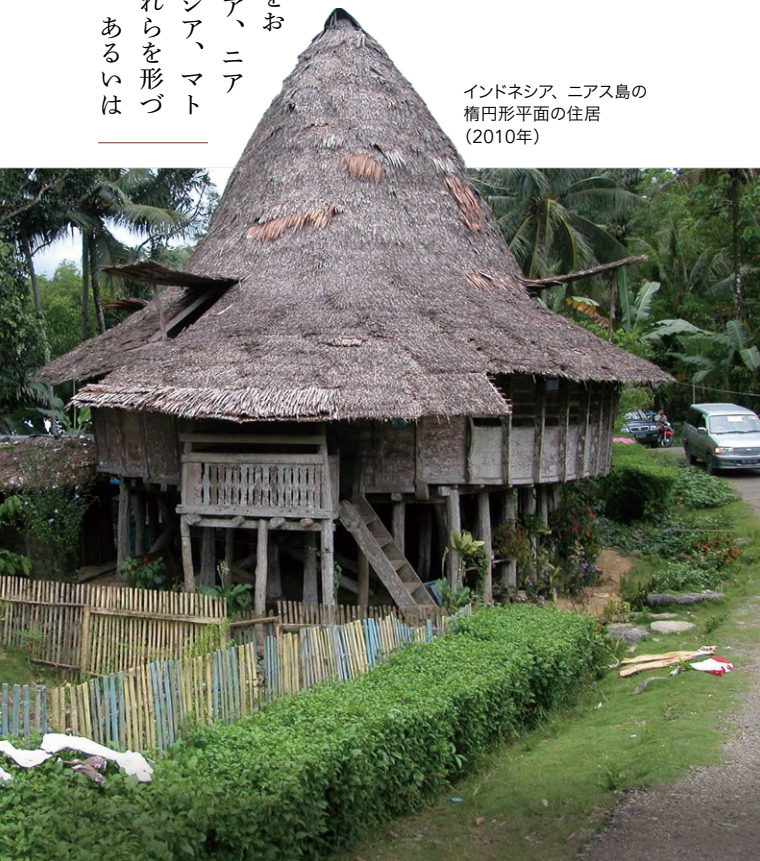
視点を養う

大学は一概に若い世代が通うところとはいえないが、それでも学生の大半が十代後半から二十代といった、ある種特殊な場であるという認識のもと話を進めたい。わたしは大学で、国内

外の住まいや暮らしを、デザインとして多角的にとらえ紹介する授業をおこなっている。例えば、インドネシア、ニ

ア島の楕円形平面の住居や、チュニジア、マタの地下穴居住宅を取り上げ、それらを形づくるデザインの条件について考える。あるいは

インドネシア、ニア島の楕円形平面の住居(2010年)





チュニジア、マトマタの地下穴居住宅(撮影: 岸本章、2003年)

とよばれる世代の学生はインターネットを利用し、世界各地のムラやマチ、祭りの写真のみならず、動画までも、いとも簡単に「見る」ことができる。そんなわけで、わたしの授業では、行くことが難しい場所のめずらしい景象を「見る」のではなく、その社会的背景にも目を向けるという研究者の「視点」をいかに身につけるか、その点について伝えることがより重要になっている。

映像をとおして体得する

授業では、例年、みんなくの映像資料を数本借りて上映している。どれも貴重な映像だが、ここではビデオテープ番組でもある「ウダイプルの婚礼」(監修: 三尾稔、制作: 二〇一三年)を取り上げよう。わたしは以前インド北部を訪れたときに、楽隊の演奏とそれに合わせて踊る人びと、電飾で彩られた山車や馬車からなる華やかなパレードに出くわしたことがある。現地ガイドに聞くと結婚式の一部だというから大変驚いた。その数年後、インドのラージャスターン州で撮影されたこの番組を視聴する機会があった。そこでようやく、インドで「見た」婚礼のパレードを、思想や社会的背景から生まれた文化として理解することができたのだ。授業のなかで、学生たちにも同じ体験をしてみようと考えている。

特にこの映像資料には学生と同世代で婚礼を迎える男女が登場する。女性が「まだ若い自分が結婚相手を決めるよりも親に決めてもらった



映像音響資料収蔵庫に保管されている映像資料(2021年)

とともに現地調査に没頭している感覚をも得ることができる。今後さまざまな映像資料との出会いに期待している。

方が良い」と語るシーンでは、同時代に生きる同世代のことばとして、学生が真剣に耳を傾ける様子が見受けられた。これは現地で得た膨大な情報のなかから要点を選び出した研究者の「視点」であり、現地にて彼らの文化に寄り添い、調査に没頭することで得た、そこにある真実を紡ぎ出した映像だからこそ、学生の心に響いたのだと思う。

ちなみに、みんなくの映像資料は、研究・教育のための館外貸し出しが可能であるが、みんなくが製作しているものには「みんなく映像民族誌」というDVDシリーズもあり、これは全国の図書館などで手軽に視聴することが可能だ。今回取り上げた「ウダイプルの婚礼」も、より詳細な研究用映像「ラージャスターンの結婚式」がシリーズ第一五集に収録されている。いずれも数カ月におよぶ儀礼の様子が的確に編集され、かつ大学の授業でも視聴可能な時間にまとめられている。これら映像資料をとおして、世界各地のさまざまな暮らしについての研究者の「視点」を学び、学生

研究者の熱い語りが、みんなくでの学びを有意義なものにする

わたしが所属する大学にはフィールドワークゼミという演習科目が設定されている。フィールドと教室を行き来しながら課題解決に取り組み、社会的問題を解決する能力を育むことを狙いとし、大学の学びの特徴のひとつとなっている。わたしのゼミでは「アートと地域活性化」というテーマを掲げ、東大阪市の市民団体や西宮市と連携し、地域のアートフェスや音楽フェスの企画から運営まで幅広くかかわってきた。昨年は西宮市文化振興課と連携し、市内のライブハウス二十数軒を結んで音楽イベントをおこなう予定であった。しかしコロナ

地域の音楽イベントに向けて、ゼミでバーカッションのワークショップを企画した。写真はそのリハーサル風景。ゼミ生が参加者役になって進行を確認した(左から2人目が筆者、2019年)



禍が収束せず中止となった。とはいえフィールドワークを重視するゼミである。学外に出て何らかのかたちで社会と接する機会はないものか、ということも思いついたのがみんなくである。

音楽祭に期待が膨らむ

みんなくは世界から集められた貴重な民族資料をじっくり観賞できる博物館として知られている。一方、文化人類学・民族学の研究者による専門知が集積されている研究機関として知る人ぞ知る存在でもある。展示物の観賞とともに民族学について研究者の話もぜひ聴きたいところだ。そこで問い合わせしてみたところ、音楽民族学が専門の岡田恵美氏に講義してもらえることとなった。

わたしたちは予習のために、岡田氏が制作した「インド・ナガランド州コヒマの音楽祭」という動画をゼミで視聴した。少数民族の文化伝承や若者への音楽振興政策など、ナガランドの音楽文化についてわかりやすくまとめられていた。現地のロックフェスも紹介されており、地域の音楽イベントに取り組んでいるゼミ生たち

桑島 紳二

大阪商業大学教授

ホンピル・ロックコンテスト(動画「インド・ナガランド州コヒマの音楽祭」より、制作: 岡田恵美、2014年)



の期待は膨らんだ。

二月八日、午前十一時より三〇分間、岡田氏の講義を受講した。演奏家だけでなく音楽パフォーマンスにかかわるすべての人が表現活動を支えていることを、「ミュージッキング」という概念を用いて説明してもらった。さらにナガ

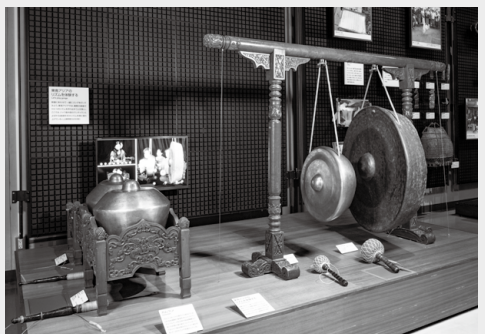
ランドの伝統的な音楽文化が、近代化や観光文化政策によってどう変化したのかを視覚資料を用いて熱く語ってもらった。質疑応答では質問が相次ぎ、ゼミ生たちの関心の高まりに驚いた。興奮冷めやらぬなか、午後、展示場をじっくり観覧し帰路についた。

学びのツボを刺激する語り

今回は講義の受講と展示場の観覧を通じて、音楽を切り口に地域文化を解説していく音楽民族学のアプローチに触れ、ゼミのテーマである「アートと地域活性化」に関する多くの気づきを

得ることができた。

民族資料として人びとの暮らしから切り取られたモノ。展示場にはそれらのただならぬ気配が充満している。民族学の見方や知識を得ることで、わたしたちはそれらが語りかけてくる何かを理解し、異文化理解の面白さや大切さ目覚めていく。みんなくでの学びを有意義なものとするためには、学生たちの興味・関心に応じた学びの勘どころを熱く語る研究者の存在が重要となる。ぜひホームページで研究者の講義を受講するための方法についてわかりやすくご紹介いただければと思う。



映像に合わせてインドネシアのゴングを叩く。ガムランのリズムとゴングの深い響きでガムランのグループが楽しめた(東南アジア展示、H0006838ほか、2021年)

録音がつなぐ 民俗芸能の過去と現在

植村 幸生 東京藝術大学教授

古い録音、とりわけ何十年も埋もれていたような録音に耳を傾けることは、むかしのアルバムを広げることに似て、つねに胸躍る経験である。吹き込まれた当時の声、物音、ざわめきは、その場に居合わせた者ならもちろんのこと、まったくの部外者にすら、その瞬間の空気を濃厚に感じさせる。録音はまさに時代のタイムカプセルである。みんなくはそうした音のタイムカプセルを

膨大に保管し、それが開封される日を待っている。

東洋音楽学会資料とは

みんなくには、一九六〇〜七〇年代に東洋音楽学会が主体となって収録した日本各地の民俗音楽のテープが一〇〇〇本以上保管されている。その一部は同学会が九学会連合(一九五〇〜九〇年代まで、学際調査を目的に組織された日本の人文・

墨地区の獅子講(保存会)員にインタビューする東京藝術大学の学生(2016年)



級演習」という授業をきっかけに、三匹獅子舞とよばれる東日本特有の民俗芸能を現地取材し、その音楽を採譜・分析する活動に学生とともに取り組んでいる。その過程で、九学会連合による利根川流域共同調査の際に収録された三匹獅子舞の実況録音に出会った。そのなかに、わたしたちが「初級演習」以来かかわっている、千葉県酒々井町墨地区の獅子舞の実況録音(一九六七年七月、資料O12619)が含まれているとわかり、学生と一緒にみんなくでそれを聴かせてもらった。

五〇年前の音に出会う

採譜作業を通じて聴き慣れた墨地区の獅子舞の、五〇年以上前の相貌に、わたしも学生たち

も驚きと興奮を隠せなかった。そこには久しく演じられていない「猿獅子」の一部や、今は用いない歌詞で「念仏」を朗々と歌う様子が吹き込まれている。現行演目「芝獅子」も、今よりテンポがはやく、リズムカルだったことがわかる。ただ当時の演者は、現在の伝承者よりもずっと若く、歳月に伴う高齢化を実感させられる。ところが地元保存会では、学会チームが調査に来たことを誰も覚えていなかった。もちろん録音が見んばくにあることもまったく知られていない。そんな録音があるなら一度聴いてみたいと、保存会の人たちは口をそろえる。わたしとしてもその願いが叶うことを望んでいるが、それだけでなく、この録音が現在を生きる人びとの心に響き、今後の伝承活動の活性化や、地域文化の再認識のために役割を果たしてほしいと願っている。おりしも二〇一九年にみんなくと東洋音楽学会は、相互の



映像音響資料収蔵庫に保管されている音響資料(2021年)

研究を促進するための連携協定を交わした。これをひとつの契機として、過去からやってきた音のタイムカプセルを未来に活かす方策を、学生や地元の方々とともに模索していきたい。



音響資料はオープンリールからデジタル化されている。収録当時の紙資料が添えられているものもある

を遂げる戦後日本の民俗文化を記録しておくことも急務であった。北は渡島半島、下北半島から南は奄美、沖縄まで、一〇地域におよぶ民俗音楽調査のテープと調査資料は、同学会の事務所があった東京藝術大学の一角に長く保管されていたが、一九九五年にみんなくで寄贈され、デジタル化とデータベース化を経て利用可能な状態になっている。寄贈当時、同大学の助手だったわたしはその経緯を覚えていたが、自分が二〇年後にその録音資料に向き合うことになることは予想もしていなかった。

二〇一六年からわたしは、同大学楽理科の「初

民博の展示場を回遊すると、さまざまな聖典が展示されていることに気づかされる。聖典に記された内容は、もともと教祖や預言者たちのことばが、記憶され伝承されるべき啓示として口承で伝えられたものであった。それらは文字化され、教団の権威の下で、正しい伝承や意味のあるものへふるいわけられ、聖典として編纂された。

展示場に遍在するこれら聖典は、ある宗教文化が地域を越えて伝播し、各地で信者を獲得し、世界宗教へと発展したことを示すひとつの歴史的証左だ。じっくりそれら展示資料を見比べるとまったく同じ聖典を展示している訳ではなく、それぞれが微妙に違っていることがわかる。地域を越えた人やモノの移動に併せて、宗教文化が世界各地へ伝播する場合、別の言語を使用する人びとにその内容を理解してもらう必要がでてくる。すなわちこれら展示資料は各地で翻訳される必要性に迫られた聖典である。そこで今回はキリスト教の聖書とイスラームのコーランに注目して、展示場をひと回りして、世界各地における聖典の翻訳をめぐる試行錯誤を追いかけてみよう。

試行錯誤が見てとれる

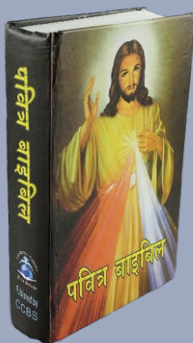
他方で、イスラームのコーランに目を向けると、聖書とはかなり異なった様相を示している。コーランは神がアラビア語で人類に下した啓示をそのまま書き留めたものであり、そのすべての章句はまぎれもなく永遠の神のことばであると理解される。したがって、原則としてコーランは翻訳が認められていない。アフリカ展示の「コーラン」を見てみると、それがアラビア語のままアフリカ大陸に到着したことがわかる。しかしそんなコーランも、伝播した先の人びとが内容を知るために実際は翻訳されてきた。西アジア展示の「コーラン紙片」を見ると、アラビア語の章句はきちんと記されているのだが、その下にペルシア語の逐語訳がつけられている。中国地域の文化展示をのぞいてみよう。そこに展示されている「コ



A コーラン(ケースつき)
(カメルーン、H0227156)



B コーラン 紙片(C942369811)



C 聖書(ヒンディー語)
(インド、H0276928)

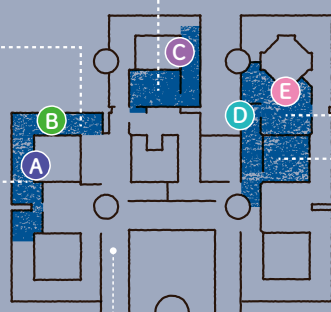
南アジア展示
「宗教文化 — 伝統と多様性」

西アジア展示
「信仰」

アフリカ展示
「祈る」

中国地域の文化展示
「宗教と文字」

朝鮮半島の文化展示
「精神世界」

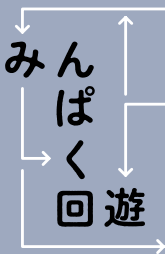


観覧券売場
本館展示場

E コーラン(中国語圏用)
(サウジアラビア、F109006902)
など

D 聖書(韓国、H0214483)

翻訳されないコーラン、 翻訳される聖書、 みんぱく回遊



田中 鉄也
中京大学准教授

Hからはじまる番号は標本番号、C・Fからはじまる番号は文献図書資料番号です。

各地の言語に翻訳する

キリスト教の聖書は、もともと旧約聖書がヘブライ語(およびわずかな部分アラム語)で、新約聖書がギリシア語で記された文書だった。四世紀以降にそれらのラテン語訳が完成し、九世紀ごろからカトリック教会で公式に用いられた。宗教改革の時代に至って聖書はドイツ語や英語へ翻訳されたが、同時に世界各地での宣教活動によって、さまざまな言語へも翻訳されるようになった。アフリカ大陸への宣教活動の結果は、アフリカ展示「諸民族の言語に翻訳された聖書」のコーナーから窺い知ることが出来る。ここではズールー語、コーサ語、ツォンガ語、リンガラ語、スワヒリ語、アムハラ語、そしてヨルバ語の聖書が展示されている。またインド亜大陸への宣教の結果は、南アジア展示におけるコンカニ語、タミル語、マラーヤラム語、オリヤー語、そしてヒンディー語の聖書から見てとれる。キリスト教は東アジアにも広がった。朝鮮半島の文化展示には韓国語の聖書が、中国地域の文化展示では中国西南部少数民族がキリスト教へ集団改宗した結果を示すものとしてミャオ語やワ語の聖書が展示されている。時代や宗派による違いはあるが、キリスト教の世界宣教と聖書の現地語への翻訳はおおむね並行して進んだといえるだろう。



インド、ラージャスターン州のハズラト・カマルウッディーン・シャー廟
(2012年)

「コーラン(中国語圏用)」では、右ページにアラビア語の章句、そして左ページに中国語の逐語訳が記されている。以上の例から、神の啓示そのものとしてアラビア語のコーランが儀礼で用いられなければならないというイスラームの厳格な規則だけではなく、あらたに信徒となった人びとが理解できるように現地語でも翻訳されなければならないといったという当時の試行錯誤が見てとれるのだ。

今回はキリスト教の聖書とイスラームのコーランだけを取り上げたのだが、民博の展示場には、仏教の経典やシク教のグル・グラント・サーヒブなどそれ以外の聖典がまだまだ展示されている。それらの聖典がどれほど翻訳されているのか、または翻訳されていないのか、ぜひ展示場で探ってみてほしい。

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第みんなくホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

みんなく映画会
**「世界の感触を取り戻せ！
 目が見えない者は、目に見えない物を知っている」**
 「最後の聲女」と称される小林ハルの生涯を描いた作品を通じて、盲目の女性旅芸人の実像に迫ります。聲女唄のライブ演奏も聴けるスペシャル企画です。
 日時 9月23日(木) 祝13時〜16時20分(12時30分開場)
 会場 本館講堂(定員160名)
 上映作品 「聲女GOZE」
 演奏 齋藤直子(聲女唄演奏者)
 解説 齋藤弘美(聲女ミュージアム 高田一顧問)
 司会 広瀬浩二郎(本館 准教授)
 ※要事前申込、先着順、参加無料(要展示観覧券)
 ※オンライン(ライブ配信)の実施はありません。

みんなく映画会
「ムンナ兄貴とガンディー」
 インドで社会現象となった傑作コメディを上映。ラジオDJに恋するやぐざの親分ムンナ兄貴が、ガンディーに取り憑かれた?! ガンディーの幻に導かれるまま、人助けをする兄貴とDJの恋の行方をご覧ください。
 日時 9月11日(土) 13時〜16時15分(12時30分開場)
 会場 本館講堂(定員160名)
 解説 杉本良男(本館名誉教授)
 司会 松尾瑞穂(本館 准教授)
 ※要事前申込、先着順、参加無料(要展示観覧券)
 ※オンライン(ライブ配信)の実施はありません。

林太郎准教授、川瀬慈准教授が「大同生命地域研究奨励賞」を受賞しました。同賞は、地域研究の分野で新しい展開を試みることも、今後さらに活躍が期待される研究者が対象になります。
巡回展
「子ども／おもちゃの博覧会」
 会期 8月22日(日)まで
 会場 島根県立古代出雲歴史博物館 特別展示室

「復興を支える地域の文化 3・11から10年」
 会期 8月4日(水)〜9月29日(水)
 会場 国文学研究資料館1階展示室

ビデオアーク新番組(順次公開予定)

特別展
**「ユニバーサル・ミュージアム
 さわる！触の大博覧会」**
 さわって体感できるアート作品が満載！本展では「歴史にさわる」「風景にさわる」「音にさわる」などのテーマのもと、さまざまな素材と手法を用いて、触の可能性を追求します。展示場に足を運び、手を動かす。来館者一人一人の身体から「ユニバーサル・ミュージアム」誰もが楽しめる博物館が始まります。
 会期 9月2日(木)〜11月30日(火)
 会場 特別展示館



「ニューホライズン」
 (制作：高見直宏)

関連イベント
ワークショップ
「こころのかたち、きもちのかたち」
 「心」や「気持ち」はどんな形をしているのか？粘土のかたちを掘って「心」や「気持ち」の型をつくり、石膏を流し込んで立体作品をつくります。完成した作品は、本館エントランスホールで展示します(希望者のみ)。
 日時 9月19日(日) 13時〜16時
 会場 特別展系館地下休憩所(定員10名)
 講師 高見直宏(彫刻家)
 対象 小学3年生以上
 ※要事前申込、先着順、参加無料(大学生・一般の参加者は要特別展示観覧券)
【申込期間】
 9月2日(木) 10時受付開始
 イベント予約サイトはこちら
<https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/>

企画展
「躍動するインド世界の布」
 インド世界の布は、場をくぎり、人をつなぎ、神と人の媒介となり、政治をうごかし、グローバル経済をうみだします。このように躍動する布の現実に光を当て、本企画展ではインド社会をつくりだしている人びとの営みを多彩な布とともに紹介します。
 会期 10月28日(木)〜2022年1月25日(火)
一般予約
 8月23日(月)〜9月15日(水)
 イベント予約サイトはこちら
<https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/>

一般予約
 8月12日(木)〜9月3日(金)
 イベント予約サイトはこちら
<https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/>
第36回「大同生命地域研究奨励賞」受賞
 この度、本館の上羽陽子准教授、小野

番組番号	タイトル	監修
1759	ウズベキスタンの美味しい羊料理ープロフ・シヨルバー	寺村裕史
1760	タンディルでパンを焼く	
1761	ウズベキスタンの結婚式	
1762	みんなく村に神楽がやって来る！ ー伊勢大神楽「ワークショップ」の記録ー	山中由里子、神野知恵
6059	徳之島の歌と踊りと祭り	笹原亮二、福岡正太
6060	東南アジアの人形芝居	福岡正太
7117	津軽のカミサマ	大森康宏
7119	豊場恐山	
7120	恐山のイタコたち	
7159	津軽イタコ 工藤タキ	
7124	伊勢大神楽：獅子舞と放下	
7208	マレーシア クランタンの影絵人形芝居	笹原亮二 福岡正太

しします。
 8月22日(日) 14時30分〜15時(14時開場)
中国ムスリムの婚姻
 話者 奈良雅史(本館 准教授)
 会場 第5セミナー室

8月29日(日) 14時30分〜15時15分(14時開場)
イタリアの食の博物館
 話者 宇田川妙子(本館 教授)
 会場 第5セミナー室

刊行物紹介
■長谷千代子、別所裕介、川口幸大、藤本透子 編
**『宗教性的人类学
 ー近代の果てに、人は何を願うのか』**
 法蔵館 4,400円(税込)
 衆目の一致する「宗教」ではないものの、異なる視点から見れば宗教的に見える活動や思想の領域ととらえ、その変化の軌跡を追うことによって、本書は現代世界における究極的価値の行方を探求する。

し芳一」を素材として、「ユニバーサル」の真意を考えます。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
 (定員30名/会場参加対象)
 8月16日(月)〜8月20日(金)
【申込先】
 国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付 8月23日(月)〜9月15日(水)



ユニバーサルな歴史体感ツアー
 (奈良県明日香村にて、2019年10月)

**みんなくウィークエンド・サロン
 ー研究者と話そう**

※申込不要(当日先着順、定員各日42名)、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなく展示資料」についてわかりやすくお話

みんなくゼミナール

参加形式
 ①会場参加 本館講堂(定員160名)
 ②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
 ・要事前申込、先着順、参加無料
 イベント予約サイトはこちら
<https://www.minpaku.ac.jp/event/lecture/seminar>
 当日参加申込あり(会場参加のみ、定員30名)

第512回
 8月21日(土) 13時30分〜15時(13時開場)
**規則的配色が作りだす宗教空間
 ー敦煌莫高窟の千仏壁画**
 講師 末森薫(本館 助教)

【申込期間】
■一般受付 8月18日(水)まで
 ※友の会電話先行受付は終了しました。

第513回
 9月18日(土) 13時30分〜15時(13時開場)
**【特別展「ユニバーサル・ミュージアム
 ーさわる！「触」の大博覧会」関連】**
**健常者とは誰か
 ー琵琶なし芳一の話**
 講師 広瀬浩二郎(本館 准教授)

ユニバーサル・ミュージアムとは「誰もが楽しめる博物館」を意味します。では、「誰も」とは何を指すのでしょうか。今回は怪談「耳な

各イベントについて詳しくは、みんなくホームページをご覧ください。

お問い合わせ
 国立民族学博物館 広報・IR係
 電話 06-6878-8560 (9時〜17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
 お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>

友の会

友の会講演会

当面のあいだ、友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

第515回 8月7日(土) 13時30分〜14時40分
**呪術を理解する
 ーヴァヌアツの邪術をめぐる**
 講師 白川千尋(大阪大学 教授)

呪術とは、科学的な理解を超えた存在や力に働きかけることで、特定の目的を達成しようとする行為や知識を指します。占いや厄払いなど私たちの身近にも珍しくありませんが、今回の講演会では南太平洋のヴァヌアツ共和国の邪術(不幸にかかわる呪術)を取りあげます。また、邪術や呪術をめぐる文化人類学者の理解のあり方についても考えます。

参加形式
 ①本館第5セミナー室(定員40名)
 ②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
 ※受付フォーム
<https://www.senri-f.or.jp/515tomo/>

第516回 9月4日(土) 13時30分〜14時40分
**金曜日には墓地で会いましょう
 ーイランにおける死の多義性と「英霊」**
 講師 黒田賢治(本館 特任助教)

身近な人を亡くす経験は、生きているうえでどうしても避けられないことのひとつです。さまざまな死の形があるなかで、その解釈も向き合い方も異なってきます。今回の講演では、中東の国イラン・イスラーム共和国における死をめぐる解釈について、特に「英霊」とされた人びとへの弔いに目を向けながら探っていきます。

参加形式
 ①本館第5セミナー室(定員40名)
 ②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
 ※受付フォーム
<https://www.senri-f.or.jp/516tomo/>

みんなく友の会オンラインレクチャー

みんなくの研究によるミニレクチャー動画を友の会のホームページ内で公開しています。

**『季刊民族学』連動シリーズ
 先生、教えてください! vol.1 川瀬先生**

話者 川瀬慈(本館 准教授)
 家庭学術雑誌『季刊民族学』176号の特集「隣りのアフリカ人」を企画、ご執筆いただいた川瀬慈先生に記事と関連したお話をインタビュー形式でうかがいました(2部構成)。
 ※公開ページ
<https://www.senri-f.or.jp/category/events/online/>

お問い合わせ
 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
 電話 06-6877-8893 (9時〜17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



書物をめぐる歴史の旅二題

鈴木 広光
奈良女子大学教授



手におさまるほど小さい『キリストにならいて』。本文には段落番号や句読記号が付記されているが見える



出精で、コミュニケー

ションが苦手、酒は好きだが弱く、食いしん坊のくせにお腹も弱く、清潔好き。ぬるま湯的環境でしか生存

できないことを自覚したわたしは、フィールドに出ずに室内で研究できる文献学を志した。誤算は、書物の学問が研究室に籠って完結するものではなかったことだ。渡々国内外の図書館に向いて書物を調べることになるのだが、そこで四、五〇〇年前の古刊本に触れることの悦楽を覚えてしまった。ただし、ひたすら書物に触れていたのでは、わたしの調査旅行には語るに値するエピソードがない。代わりにこの文章では、長い旅路の末にわたしの書齋にやってくるためずらしい本をとおして、書物をめぐる歴史の旅をご一緒いただきたいと思う。

古刊本のルーツを調べてみました



ロペール・エティエンヌ編『旧新約聖書用語索引』を持つ筆者(2021年)

『キリストにならいて』の超小型本

わたしは四半世紀ほど、一五九六年刊のキリシタン版『コンテムツス・ムンヂ』の翻訳底本探索を続けてきた。この日本語訳の原典はドイツの思想家トマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』である。聖書に次いでよく読まれただけあって、版の数がとても多く、底本探索は困難を極めているのだが、調査を重ねるうちに、関心は『キリストにならいて』の出版の歴史に移っていった。ただ、海外の調査には、時間と旅費を捻出せねばならない。限られた閲覧時間では書物を観察し尽くせず、帰国後にモヤモヤ感が残った。わたしは思った。「買った方が安いんじゃないか?」。かくして、一六世紀初頭か



超小型本『キリストにならいて』の扉

ら一七世紀前半までに出版された同書古刊本八点がわたしの書齋に集まった。

『キリストにならいて』は一四七三年ごろ、アウグスブルクで初めて出版された。同版は大型のフォリオ(二つ折判)だったが、八三年版がクアルト(四つ折判)、八七年版がオクタヴォ(八つ折判)と、短期間にサイズが小型化していった。書物の普及と小型化が関係にあることは出版史の常識だが、他の書物に比して小型化のスピードが明らかに速い。わたしの書齋の古刊本も一六世紀初頭の刊本こそオクタヴォだが、同世紀後半以降の刊本は小型化がさらに進んでいる。

そのなかでもとびつきり小型の本は、北フランスのドゥエーで一六〇八年に刊

行された版で、大人の掌におさまるくらいの大さきである。小型だがしっかりと作りで、本文の各段落には番号が付され、句読記号が多用され、さらには索引も付いている。携帯に便利だけでなく、徹底して実用的なのだ。編者のイエズス会士ヘンリクス・ソマリウスが『キリストにならいて』を携帯可能な実用書に仕立て上げたのはなぜか。おそらく、この本の主題である神との内的対話や瞑想の彼が本文に施した工夫は、アントワープのプランタン印刷所版でもおこなわれ、後世に引き継がれた。

世界初の聖書用語索引

次いで、超小型本とは対照的な大型の書物を紹介したい。フォリオ判のこの書物は、一五五五年にジュネーブで刊行されたロペール・エティエンヌ編『旧新約聖書用語索引』である。わたしがこの本を入手した目的は、活字書体史研究の資料として重要だから。本書の印刷には、一六世紀前半に活躍したパリの活字制作者クロード・ギヤラモンがデザインしたローマン体活字が使用されているのだ。

パリの代表的印刷業者アンリ・エティエンヌの次男にして古典学者のロペールは、ギリシア語聖書の印刷者として著名である。現在も使われる聖書の節番号は、彼がジュネーブに亡命して出版した一五五一年のギリシア語聖書第四版で本文に使用したのが始まりだ。このラテン語聖書用語索引も、聖書のすべての語を前後の文脈付きで登載した史上初の試みである。それを可能にしたのは、版が違っても語の場所を指示し得る節番号が、彼自身によって聖書本文に付されていたからだ。彼は亡命後も、エティエンヌ印刷所の商標を使用している。凶案に書き込まれ

たラテン語 *NOLI ALTVM SAPERE* (高ぶる勿れ) は、新約聖書「ローマの信徒への手紙」二一章二〇節に拠る。試みに用語索引の *NOLI* の項を検索してみると、ちゃんとこの句を確認することができる。大型の『旧新約聖書用語索引』は学者や聖職者のための書物である。普及を意図した小型の『キリストにならいて』とは対照的だが、実用性、利便性の高さで共通する。活版印刷術の技術的成熟によって書物に付与されたそのような性質の歴史的意義を、わたしたちは現物に触れることで実感できるのである。



『旧新約聖書用語索引』の扉にあるエティエンヌ印刷所の商標(ラテン語句は「ローマの信徒への手紙」に拠る)

箕——自然を編む知恵とわざ

いまいし
今石 みぎわ

東京文化財研究所主任研究員

現在の日本において、作り手・使い手ともに減少傾向にある「箕」。しかし、その姿形に目を凝らすと、複雑かつ高度な編み組みの技術が凝縮されていることがわかる。日本各地に伝わる知恵とわざ、そしてそれらを生かそうとするあらたな動きについて紹介したい。

「箕」とは

「箕」はほんの数十年前まで、農業をはじめとする日本のさまざまな生業の場面でごく当たり前に使われてきた民具だ。

おもな用途は、穀物の脱穀・調整。穀と実にわけた米や麦などを箕に入れ、煽るよう上下すると、風によって軽い殻やゴミが飛ばされ、重い実だけが箕のなかに残る。

物を運んだり干したりするにも重宝され、便利な容器として多様な場面で活躍してきた。現在も見られる片方の口が開いた形の箕は、弥生前期の遺跡からも発掘されており、二〇〇〇年以上にわたって使われ続けてきたことがわかる。

地域の植生を映す

一口に箕といっても、その形は地域ごとに特色があり、大きさや深さ、しなやかさはさまさま。その多様性を生み出すのに一役買っているのが、地域性豊かな素材だ。大雑把にいえば、近畿を中心とする一帯にはマダケのヒゴを網代に編んだ箕が多く、それ以外の広い一帯では笹竹や樹木・樹皮を組み合わせてゴザ目に編んだものが主流。カゴなどが通常一〜二種類の素材から作られるの



フジの内皮を層ごとに剥ぎ、箕の縦材とする(千葉県木積、2015年)



イタヤとフジで編む太平箕(秋田県)

6種類の広葉樹で作る若山箕(新潟県)

ヤダケとフジで編む論田・熊無の箕(富山県)

アズマネザサとフジで編む木積の箕(千葉県)

民俗知の結晶

さて、箕作りの工程におけるハイライトは編み組み作業であるが、じつは作業としてより重要なのは素材の採取と加工だ。全体の労力と時間の七〜八割が割かれ、自然と向き合うための豊かな知恵が惜しみなく注ぎ込まれる。すべての素材には伐採の適期があり、それを逃すとよい材は採れない。どこにどんな材があり、どの部位をどう使うか、質のよい材をどう見極めるか、持続的によい材を採るために何をすべきか、そうした知恵とわざのひとつひとつが、職人の身体にしみついている。こうした民俗知は言語化されにくい。実体験をおし

ゴで巻いてとめる。補強と装飾にはヤマザクラの樹皮。広葉樹林帯の申し子のような箕だ。
一方、南東北から九州までの広い一帯では、アズマネザサやネマガリダケ、ヤダケなどの笹類と、フジの内皮やスギ皮などの樹皮を編んだ箕が主流となる。同じような素材の組み合わせでも、材の質や加工法によってできあがりの印象は異なる。例えば富山県氷見市の論田・熊無地区の箕はヤダケを、千葉県木積市の木積の箕はアズマネザサを用いる。縦材は同じフジだが、論田・熊無ではフジを

叩き潰して繊維をほぐしたり、木積ではフジを一定期間土に埋めてから手と口で内皮を剥ぐ。結果、論田・熊無の箕はがっちりとして野趣に富み、木積の箕はしなやかで柔らかな印象に仕上がっている。
箕は、弥生時代に稲作とともに中国大陸からもたらされたと考えられている。そのときはひとつの形であっただろう箕が、長い歳月をかけてこれほどまで地域色豊かに展開してきた、その過程を辿ることは、各地の先人たちがよりよい道具を求めて積み重ねてきた、試行錯誤の跡に思いを馳せる営みでもある。



ヤダケのヒゴのあいだにフジを挟んで編む(富山県論田・熊無、2016年)

日本では、生活様式の変化や新しい素材の台頭によって、箕の居場所は失われつつある。かつては少なくとも百数十カ所以上あった全国各地の箕の産地も、風前の灯火だ。職人がいなくなるのとともに、こうした民俗知も一緒に消えてしまうことは、あまりに惜しい。
今、地方に拠点を移して農業などを志し、箕を使いたいという若い人たちが少しずつ出てきている。箕の技術を使ったカゴ作りや、箕の新しい用途を考える努力もなされている。この美しい民具と、それを作り・使う文化を、どうにか生きた形で次世代に伝えたいと、切に願っている。

に対し、特にゴザ目の箕は、厚みや幅、質感の異なる四〜五種類の素材を組み合わせて作る。道具としての堅牢さと、作業に必要なしなやかさを兼ね備えるためには必然的な選択といえ、そこには地域ごとの植生が見事に反映されている。
東北を中心とする降雪地帯に多いのは、樹木や樹皮を用いた箕だ。イタヤカエデとフジを編んだものがもつとも一般的で、イタヤは木質部を薄く剥いでヒゴ状にし、フジは内皮をテープ状に剥ぐ。「馬が乗っても潰れない」といわれる堅牢さをイタヤ材が、脱穀作業に必要なしなやかさをイタヤ材が作り出す。
新潟県北部には六種類もの広葉樹を用いた箕がある。ヤマモミジとテツカエデ、ミズナラのヒゴを編み、ウワミズザクラの持ち手をヤマウルシのヒ

ガンディーー気取り

杉本良男 民博名誉教授



映画の舞台となったムンバイの風景(撮影:松尾瑞穂、2016年)



右:ムンナ兄貴(右)と仲間のサーキット
左:ムンナ兄貴の前にあらわれたガンディー
©Vishnu Vinod Chopra Films Pvt. Ltd.

「ムンナ兄貴とガンディー」

原題: Lage Raho Munna Bhai
2006年/インド/ヒンディー語/144分/DVDなし
監督: ラージクマール・ヒラーニー
出演: サンジャイ・ダット、ヴィディヤ・バランほか
2021年9月のみんぱく映画会にて上映予定(詳しくは12頁をご覧ください)



不思議なことに、マハトマ・ガンディーの生涯を扱った映画は、イギリスのリチャード・アッテンボロー監督による「ガンディー」(Gandhi/邦題「ガンジー」/一九八二年)があらわれるまでほとんどなかった。ガンディー自身は、近代テクノロジーを蛇蝎のごとく嫌い、その代表ともいえる映画もまったく受け入れなかった。そのため、生存中はもちろん没後も何かしらの忤度があったのかもしれない。映画「ガンディー」はガンディーの聖人化に決定的な意味をもったが、最近のブラック・ライブズ・マター運動関連でかえってそれが仇になった感もある。特にアメリカ、イギリスなどでチャール元首相をはじめとする偉人の像が攻撃対象にされ、ガンディー像も撤去されたりしている。

大ヒットを記録した娯楽映画

「ムンナ兄貴とガンディー」は、直接ガ

スター、スニル・ダットが出演していた。第三作も予定されていたが、本人の収監やコロナ禍などさまざまな事情によって実現していない。

「ムンナ兄貴とガンディー」では、ギャングのムンナ兄貴がラジオのディスクジョッキーの女性ジャンヴィーに好意をいだき、誘拐した教授たちの知恵を借りてガンディーについてのクイズに優勝し、夢が叶って直接面会の機会を得る。ジャンヴィーに歴史学の教授だと名乗ってしまい、講演の依頼を受けたムンナ兄貴は、図書館にこもって集中的に勉強するうち、夢かうつつかガンディーのすがたが見えるようになる。その助言を得ながら、特に非暴力主義や平和的な抵抗運動などに強い影響を受けて改心し、ついには人びとの悩みにガンディーばりの答えを与えてラジオの聴取者を感動させるようになっていく、というストーリーである。

ストーリーが荒唐無稽であるうえに、私生活でも何かと問題の多いサンジャイが主役を務めていて楽屋落ちに笑えるのだが、映画は大ヒットとなった。大衆娯楽映画部門をはじめ四部門で二〇〇六年度国民映画賞を受けたほか、国内の映画賞を数々獲得した。さらに、海外からの批評もすこぶるよくて、国際的に高く評価され、さまざまな栄誉を受けている。

ンディーの生涯を扱っているわけではないが、その存在が重要な意味をもつ映画である。日本でも公開された「きつと、うまくいく」(3 Idiots/二〇〇九年)などで大ヒットを連発しているラージクマール・ヒラーニー監督、プロデューサー、ヴィノッド・チョープラのコンビによる優れた娯楽作品である。

この映画は典型的なボリウッド娯楽映画で、ギャングのムンナ兄貴を主役にしたシリーズの二作目である。第一作の「医学生ムンナ兄貴」(Munna Bhai M.B.B.S./二〇〇三年)は大ヒットとなり、国民映画賞大衆娯楽映画賞も受けた。主演はサンジャイ・ダットで、父役として実父の大

ガンディー主義から「ガンディーギリ」へ

サンジャイは、スニル・ダットと国民的女優ナルギスという大スターのあいだにうまれた。ただ私生活では恵まれたとはいえず、結婚と離婚を繰り返し、女優のアイシュワリヤ・ライにつきまわって物議をかもしたこともある。また一九九三年のボンベイ騒乱の際に武器の不法所持で逮捕され、最高裁まで争ったが二〇一三年に有罪が確定して二〇一六年まで収監された。その波瀾の前半生はヒラーニー監督によって映画化されたが(Saaj/二〇一八年)、サンジャイの苦悩がよく描かれた佳作である。若手スター、ランビル・カプールがサンジャイ役を演じ、ひそかに本人も出演している。

「ムンナ兄貴とガンディー」は、アッテンボロー版の「ガンディー」に対するインドからの応答のようになった。ガンディーに学んで行動するそれまでの「ガンディー主義」をもじった、より大衆的な「ガンディーギリ」(ガンディーー気取り)を流行させて社会的にも大きな影響を与えた。ただ監督がひどくショックを受けたのは、逆にインド国内でガンディーがいかに知られていないか、だったという。ある少年が映画を見ていわく、「ムンナ兄貴は良いけれど、マハトマ・ガンディーって誰なの」。

迷える異文化理解

ひらの ちかこ
平野 智佳子

民博 人類基礎理論研究部

オーストラリアの中央砂漠でアボリジニとやりとりをしていると頻繁に「パーリャ」ということばを聞く。オクケーとかグッドという意味だ。「パーリャ」と聞くとホッとする。それはわたしが「道」からはずれていないことを意味するからだ。

わたしはとある辺境のコミュニティでアボリジニと共同生活を送っている。調査開始当初、わたしはまったくの出来損ないであった。見当はずれのことをしては注意を受けた。みんなを困らせたいわけではない。が、アボリジニの自治がおこなわれてきたその土地で、何が「正解」なのかがわからないのだ。年端のいかない子どもがさっと集めてくる薪も、わたしはまともに拾えない。

そんな暮らしの道しるべとなったのが「パーリャ」だった。わたしは落ちていた枝木を見せては「パーリャ？」と尋ねた。枝木が適切だと「パーリャ」という返事が返ってきた。わたしはみんなに「パーリャ」と言われるのが嬉しかった。まるで彼らの世界の「正解」を叩き出したような気がしたからだ。「オーストラリア大陸にもっとも古くから居住するアボリジニ。過酷な土地で生き抜いてきた人たちの言うとおりにしていたらまず間違いない!」。そう信じるようになった。

ところが、その考えは間もなく打ち砕かれた。ある日、わたしたちは荒涼とした砂漠に狩りに出かけた。「あの丘にカンガルーがいる」。アボリジニの狩りの名手の一言にみんなが高揚した。

運転手のわたしはただ言われるがまま車を走らせる。目の前のガスメーターの残量はみるみる減っていく。「かなり減っているけどこのまま行っているのか?」。わずかに不安がよぎる。「パーリャ?」と聞く。すかさず「パーリャ!」と返ってくる。「さすが! 彼らの言うとおりにしていたら大丈夫だ」。わたしは安心して車を走らせた。

しかし、しばらくして悲劇は起きた。「お前、ガソリンの予備は持っているのか?」。ガスメーターを一瞥した狩りの名手が尋ねてきた。「予備? あるわけない!」。わたしは目を丸くした。その返答にみんなの表情が曇った。「この残量だとガソリンスタンドまでもたない」。

「さっきのパーリャは何だったんだ?」。頭のなかで問いがこだまする。外の温度は40度を超えている。水場も木陰も人の気配もない。最寄りのガソリンスタンドにたどり着くまでのあいだ、わたしは死の恐怖を味わった。後日、砂漠の遭難死のニュースを見かけた。隣にいたアボリジニが呟く。「砂漠に魅せられて死ぬ奴もいるんだ」。また、血の気が引いた。

それから彼らの「パーリャ」を疑うようになった。彼らは怪訝な顔をするわたしに「パーリャ?」と尋ねるようになった。わたしがそうしたように、彼らもわたしのなかの「正解」を探っているのだ。今でも「パーリャ」はわたしたちの会話でもっとも頻出する単語だ。迷走しながらの異文化理解は果てしなく続く。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2021年8月号

第45巻第8号通巻第527号 2021年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆油由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2021年

8月号

編集後記

民族学・文化人類学の基本は、フィールドワークとよばれる現地での人びとのかかわりをとおした参与調査である。みんぱくでは、モノの展示や資料の公開などをとおしてそれらの成果を発信している。この時点で、現地での体験はモノや音、映像など、いわば疑似的なものに変容している。そのうえ、コロナ禍においては疑似的なものをさらに間接的に経験する機会が増えた。

そうしたことを考えるなか、本号の特集「みんぱく活用術 大学編」では、みんぱくが提供する情報が想像力をふくらませ、過去への思いと未来への創造の根源になることを改めて感じさせてもらった。

今日、博物館はモノや情報を保管する場所ではなく、交流する場へと向かっている。世界の文化の担い手と来館者をつなぐのが博物館や研究者である。人が現実的に触れ合う大切さを、われわれはコロナ禍で思い知ったように、疑似的なものとおしたとしても世界の人びとが理解し合い、交流する場として博物館が機能することを期待したい。(三島禎子)

次号の予告 9月号

特集「触発される展覧会

——ユニバーサル・ミュージアム」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

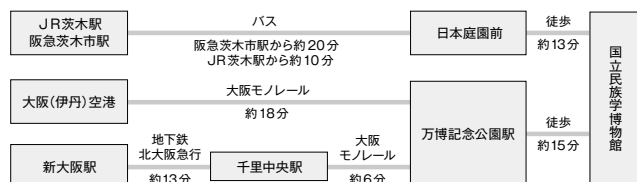
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)

年末年始(12月28日~1月4日)

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



学生証や職員証の提示で
みんぱくを何度でも!

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ



大学等教育機関とみんぱくが連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を
学生のみなさんに提供することを目的とした会員制度です。学校、学部単位でご入会いただけます。

学生証および職員証の提示でご利用いただけます。

- ・展示の無料観覧（一部の特別展では入館料が必要になる場合があります）
- ・映画会や研究公演等催しへの参加
- ・友の会が主催する催しへの参加
- ・ミュージアム・ショップでの割引

学校、学部単位で提供いたします。

- ・広報誌『月刊みんぱく』の送付
- ・家庭学術雑誌『季刊民族学』の送付
- ・みんぱく館内での登録校紹介コーナー（パンフレットなど）の設置



ご登録校

大阪大学／京都大学／千里金蘭大学／
学校法人塚本学院(大阪芸術大学・大阪芸術大学短期
大学部・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校 ※通信
過程を含む)／同志社大学 グローバル地域文化学部／
同志社大学 文化情報学部／学校法人立命館(立命館大
学) 敬称略(2021年7月現在)

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/about/campus_members/

年会費は利用対象人数によって異なります。

お問い合わせ

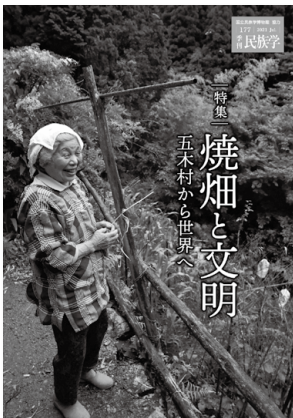
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (平日 9:00 ~ 17:00) E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



家庭学術雑誌『季刊民族学』のご案内

2021年7月31日発行!



最新号

177号特集 焼畑と文明 ——五木村から世界へ

国立民族学博物館第2代館長 佐々木高明は、焼畑研究の第一人者、照葉樹林文化論の提唱者のひとりとして知られている。焼畑とは人類にとってどのような営みか、日本における焼畑のはじまり、世界の焼畑の現在、焼畑の今日的意義などを、佐々木の焼畑研究の原点の地、五木村から発信する。

バックナンバーのご案内

176号特集 隣りのアフリカ人 ——グローバル世界を 生きる人びと

物理的にも心理的にも「遠い」といわれるアフリカから、彼らはなぜ日本をめざしたのか。アフリカ文化のもつゆたかなネットワーク性・身体性・音楽性は日本文化になにをもたらすのか。



175号特集 生き物と現代文明

174号特集 キリスト教受容のかたち ——世界史のなかのかくれキリスト

講読方法

『季刊民族学』は国立民族学博物館ミュージアム・ショップで販売しております。

国立民族学博物館友の会の維持会員、正会員のみなさまには、年間4冊お届けしております。

ご購入は一般価格:2,750円(税込)、会員価格:2,200円(税込)。郵送の場合は別途発送手数料をご負担ください(会員は不要)。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

WEBサイト「World Wide Bazaar」
<https://www.senri-f.or.jp/shop/>
E-mail shop@senri-f.or.jp



国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

